

「わあ！ おもちやみたいなメロンソーダ、かわいい！」  
 「パンケーキじゃなくてホットケーキっていうのがいいよね。絵本に出てきそうじゃない？」

早く食べたいのに、持っているスマホでこれでもかと写真を撮っているのは、大学生くらいのおねえさんたち。最近の『けやき』は、こんな風に若いお客さんたちがやってくるが増えた。なぜかというところ……

「見て！ SNSに写真アップしたら、もう『いいね』がこんなに付いた」

おねえさんたちが笑い声をあげてはしゃいでいる。

カウンター席に座って紙ナプキンの補充を手伝っていた私は、その様子をうかがいながらクスッと笑ってしまった。『けやき』はボロいけど、言い方を変えたとレトロでおしゃれらしい。昔ながらのメニューは、今のものとは違った魅力がある。それを撮った写真はSNSでひとときわ目を引くものになるとかで、こんな風に『けやき』は若い人にじわじわと浸透しつつあるのだ。

「スマホでうちの写真を撮って、ありやどうするんだ？」  
 カウンターの向こうにいるおじいちゃんが身を乗り出し、私にこそっと聞いてきた。

「インターネットに載せるんだよ。そうするとね、たくさんのおねえさんが見てくれるの」

「はあ、おれにはよくわからねえな」

「いいじゃん。だって、ただでお店の宣伝してくれるんだよ」

「ますます意味がわからねえ。何のためにそんなことするんだか」

そう言って、おじいちゃんは自分の腰をこぶしでトントンと叩いた。最近、おじいちゃんをよくあの仕事をしている。腰が痛いのかな。お客さんが増えて、疲れるのかもしれない。そう思った矢先に、お店のドアベルがカランコロンと鳴り、またお客さんがやってきた。

「うおっ！ めっちゃ歴史感じる！」

やってきたのは二十代くらいの若い男のひと三人組。一人は手にノートくらいの大きさのタブレットを持っている。動画を撮っているんだ。あれもネットに投稿するのかな。私にはすぐにピンときた。

「えー、みなさん、見てください。この店内、あずき色のじゅうたん、革張りのイス、昭和感ハンパないっすね」

男のひとはタブレットに向かってテレビのレポーターみたいに話している。

「いらっしやいませ。こちらの席でいいかしら」

おばあちゃんに案内されてボックス席についた三人組がさっそくメニューに目を通す。しばらくして「すいませーん」という声があった。おばあちゃんが注文を聞きに向かう。なんとなく嫌な予感がして私は耳をそばだてた。